

第68回

正倉院展

ごあいさつ

天平勝宝8歳(756)の光明皇后による宝物の献納より1260年、昭和21年(1946)の第1回目となる正倉院展の開催から70年の節目となる本年の正倉院展には、北倉10件、中倉29件、南倉22件、聖語蔵3件の、合わせて64件の宝物が出陳されます。初めて公開を迎える宝物は、今回9件を数えます。

本年も例年のように9000件に及ぶ正倉院宝物の概要が展観され、天平文化の精華が広く示されますが、一昨年に完了した正倉院正倉の整備事業が総括されたことを受け、宝庫や宝物の来歴を伝えるような宝物が多く見られる点に特色があります。また、近年目覚ましい成果を上げている宮内庁正倉院事務所による最新の調査の成果を反映した内容も大変注目されます。

聖武天皇のご遺愛品である漆胡瓶は、シルクロードの遺風を感じさせる至宝として名高く、遙か西方の世界のイメージを喚起させるに充分です。同じく北倉に伝来した鳥木石夾纈屏風は、ペルシア起源の構図に中国・唐で成立した花鳥画の要素が加わって成立したもので、唐文化を受容した華やかな天平文化の一端を見ることができます。

また、本年は聖武天皇一周忌齋会で懸吊された大幡(灌頂幡)に関連する宝物がまとまって出陳されるのも注目されます。大幡は総長10数メートルに及ぶと考えられる巨大な幡で、今回は幡の本体、脚、脚先の飾り、芯に使われた裂が出陳され、その全容が想像できます。巨大な幡の翻る様は、仏教文化の成熟を象徴するものであったといえるでしょう。

このほか、宝庫に伝わった奈良時代の銭貨や金属の鋳塊、正倉院の鎮守ともいべき社にゆかりのある鏡など、興味深い初出陳の宝物にもご注目下さい。

年月を重ねた今も光輝を失うことなく、新たな魅力を発し続ける正倉院宝物を、年に一度のこの機会に心ゆくまで鑑賞いただければ幸いです。

最後になりましたが、本展の開催にあたりご高配、ご協力を賜りました宮内庁正倉院事務所をはじめ、関係者の皆様に、厚く御礼を申し上げます。

平成28年10月

奈良国立博物館長 湯山 賢一

正倉院展をご覧になる前に

■正倉院とは？

奈良時代に、国、郡、大寺院などには「正倉」と呼ばれる倉庫が建てられ、穀物や種々の財物、道具類が納められました。正倉が置かれた区画が「正倉院」です。現在私たちが正倉院と呼んでいる校倉の建物は、東大寺正倉院の正倉ですが、他の役所や寺院の正倉院がすべて長い歴史の中で失われたため、今日では正倉院は固有名詞として使われるようになりました。なお、正倉院は明治時代に東大寺から宮内省に管轄が移り、現在は宮内庁正倉院事務所の管理するところとなっています。

正倉院宝庫は東を正面とした南北に長い建造物です。内部は北倉、中倉、南倉の3部屋に分かれており、北倉と南倉は校倉造、中倉は断面が長方形の板を積み上げて壁とした板倉造です。近年行われた年輪年代測定調査によって、宝庫は741年から750年の間に建立されたと推定されています。

■正倉院宝物とは？

宝庫には約9000件の宝物が伝わっています。一口に正倉院宝物といっても、各宝物の由緒や伝来は実にさまざまです。宝物のうち中核とすべき存在は、聖武天皇が亡くなった四十九日目にあたる天平勝宝8歳(756)6月21日に、光明皇后が東大寺大仏に献納した聖武天皇のご遺愛品です。聖武天皇のご遺愛品は北倉に納められています。このほか、

天平勝宝4年(752)4月9日に行われた大仏開眼会において、皇族や貴族たちが大仏に献納した刀子や佩飾品、帯、数珠、ガラス器、銀器などを見ることができます。これらは主に中倉に納められています。また、大仏開眼会をはじめとする東大寺の法要で用いられた仏具類、楽器、樂舞の面や装束などが伝えられ、これらは主に南倉に保管されています。さらに、宝庫には宮中の年中行事で用いられた道具類のほか、武器・武器、文房具、遊戯具、飲食器、文書なども見られます。

宝物は聖武天皇の時代を中心に、奈良時代(8世紀)に製作されたものが大半を占めています。これに加えて、ササン朝ペルシア、中国・唐、朝鮮半島の統一新羅など、アジア諸国からもたらされた品も含まれています。

■正倉院展について

正倉院展は昭和21年(1946)に始まりました。奈良国立博物館での開催は今年で68回目ですが、東京国立博物館で開催された3回を含めれば71回目になります。正倉院宝物は現在も勅封によって厳重に管理され、古来行われた曝涼(虫干し)の伝統に則り、毎年秋にのみ宝庫が開封されます。正倉院展はこの期間に合わせて行われ、毎年約60件前後の宝物が出陳されます。



2階展示会場図

天平の音楽と舞踊 19

献物に関わる宝物 12 9

聖武天皇ご遺愛の品々 5

聖武天皇一周忌斎会と法会の荘厳 20

特別展示「正倉院の平瓦」

天平伽藍の供養と荘厳 36

休養所

奈良時代の金属生産 48

奈良時代の暮らしと装身具 49-1 55

正倉院文書 61

聖語蔵の経巻 62

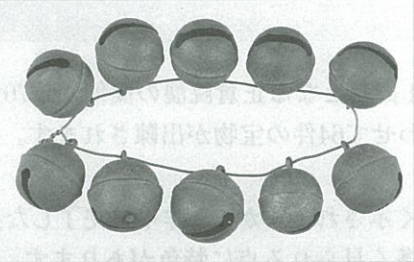
入口

出口

EV



29 銀平脱龍船墨斗



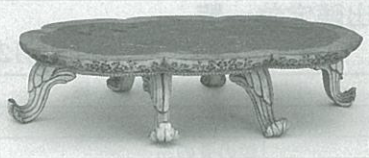
36 唐草文鈴



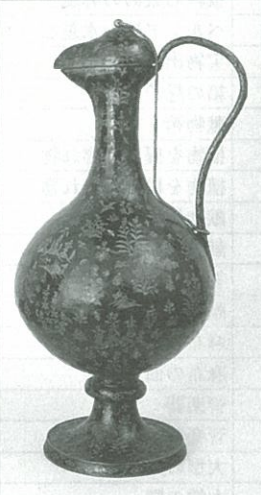
55 撥鏤飛鳥形



26 浅緑地鹿唐文
錦大幡脚端飾



12 粉地金銀絵八角長几



6 漆胡瓶

1階平面図

西新館 新館入口 東新館

地下回廊へ

新館出口

託児室

インフォメーション

階段2階へ

AED

多目的トイレ

救護室

地下化粧室へ

1階平面図

●ご来館のお客様へ

- ・正倉院展は東西新館2階が会場です。東新館→西新館の順にご覧ください。
- ・展示品(宝物)保護のため、会場内は照明を落としてあります。
- ・会場内での写真撮影や、懐中電灯、レーザーポインタ及び携帯電話の使用はご遠慮ください。
- ・混雑時には、やむなく入場を制限することがありますのでご了承ください。
- ・化粧室は東新館1階、西新館1階・地階の他、地下回廊にもございます。
- ・リュックサックや大きな荷物をお持ちの方及びベビーカーの方は館外のコインロッカー又は手荷物預かり所をご利用ください。

正倉院展の図録(目録)について

- ・「正倉院展」図録(目録)は西新館1階、地下回廊ミュージアムショップで販売しております。

❖ 展示の見どころ ❖

正倉院展の見どころを、各コーナーにそってご説明します。

1. 聖武天皇ご遺愛の品々

天平勝宝8歳(756)5月2日、聖武天皇が崩御し、その七七忌(四十九日)に当たる6月21日、お後の光明皇后によってご遺愛の品が東大寺大仏に献納されました。本年は宝庫の北倉に納められたそれらの品のうち、通天牙笏^①、大魚骨笏^②という貴重な素材が用いられた笏、雲鳥背円鏡^③、鳥木石夾纈屏風^⑤、漆胡瓶^⑥などの調度品が出陳されます。いずれも天皇のご所用にふさわしい品格を備えた品々で、当時の宮廷生活が垣間見られます。

2. 献物に関わる宝物

正倉院宝庫には、大仏開眼会を始めとする東大寺の法要において、皇族や貴族たちが献納した宝物が数多く伝えられています。献納の品は箱に入れたり、小さな台(机)に載せて仏前に進められたようで、宝庫の中倉にはそのような箱と台(机)が数多く伝えられています。本年は貴重な素材が用いられた横楠箱^⑨、天板の側面に施された文様が美しい粉地金銀絵八角長几^⑫、台の上敷きとして使われた赤紫腦纈^⑬、几褥^⑭などが出陳され、献物に込められた人々の敬虔な祈りが感じられます。

3. 天平の音楽と舞踊

奈良時代の東大寺では天平勝宝4年(752)4月9日に行われた大仏開眼会を始め、大きな法要がいくつも営まれました。そこではわが国の伝統的な楽舞のみならず諸外国の楽舞も上演され、会場は幡などの様々な荘厳具で美しく飾られました。宝庫の南倉には、これらに関係のある面や装束、楽器、荘厳具などが数多く伝来しています。布作面^⑮や竿^⑯と笙^⑰は、中国から伝えられた楽舞に用いられたと考えられる品で、国際色豊かな当時の法会の様子がうかがえます。



⑤ 鳥木石夾纈屏風



⑨ 横楠箱



⑰ 笙

4. 聖武天皇一周忌斎会と法会の荘厳

天平勝宝9歳(757)5月2日に営まれた聖武天皇の一周忌法要は、大仏殿に僧1500人余りを招いた立派なものでした。宝庫にはこの折に用いられた多数の幡(仏教的な意味合いの旗・幟)が伝わっています。今回は多数の幡のうち、大幡と呼ばれる幡の一部^⑳、幡の脚の一部^㉑～^㉒、幡の脚先の飾り^㉓、芯として幡の中に入れていた繩^㉔が揃って出陳されます。巨大な幡の姿からは、法会の盛大さと仏教文化の成熟が伝わってきます。

5. 天平伽藍の供養と荘厳

寺院の内部は様々な仏具で荘厳――すなわち厳かに飾られました。磁皿^㉕～^㉖は法会などで使用された華やかな焼き物です。また鈴鐸類として整理されている金属製の鈴や玉^㉗～^㉘は、かつては幡や華鬘(堂宇の長押などに懸けられる荘厳具)の一部をなしていたと考えられるものです。現在は外れて散在していたものを整理して銅線などで括っています。こうした光輝を放つ鈴や玉からは、美しく飾り立てられた奈良時代の伽藍の様子が想像されます。

6. 奈良時代の金属生産

正倉院宝庫には奈良時代の金属生産の様相が垣間見ることのできる多種多様な宝物が納められており、本年は溶かした金属を鋳型に流しこんで成形する鋳造技法に関連する品が出陳されます。中国・唐代の鏡を祖型とした花虫背八角鏡^㉙や、奈良時代の銭貨である和同開珎^㉚・神功開宝^㉛は、いずれも日本国内で鋳造されました。そのほか合金の材料であったかと想像される珍しい宝物にアンチモン塊^㉜があり、当時の金属材料や生産を考える上で注目されます。



㉒ 大幡残欠



㉕ 磁皿



㉜ アンチモン塊

7. 奈良時代の暮らしと装身具

奈良時代の官人は、腰に革帯を着け、威儀を整えるために笏を執りました。木笏^㉕や革帯^㉖は下級官人の用いたものと同等のようですが、楽舞に用いられたものとの説もあります。また奈良時代には中国の制度に倣い、帯に刀子や魚形などの装身具を付けることも流行しました。華麗な装飾の施された黄牙彩絵把紫牙撥鏤鞘金銀莊刀子^㉗はその一例です。このほか腰回りを飾ったと思われる香袋の残欠^㉘や何らかの飾りに用いられた鳥形^㉙など、天平人のおしゃれ感覚にも大変興味が持たれます。

8. 正倉院文書

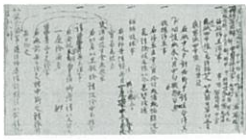
正倉院宝庫には、造東大寺司の写経所の帳簿類が数多く伝わっています。写経所で記された事務書類は、その用紙に他から転用された文書や廃棄文書の裏が利用されることが多く、諸国の戸籍や計帳、正税帳(決算報告書)など、全国から奈良の都に上進された文書が紙背(紙の裏)に残されており、奈良時代の社会を知るための重要史料となっています。また当時の書状や上申書などの生々しい内容からは、造東大寺司や写経所で働く人々の息遣いが伝わってくるかのようです。

9. 聖語蔵の経巻

正倉院宝庫の東南にあるもう一つの校倉造の蔵は聖語蔵と呼ばれています。もとは東大寺の尊勝院の経蔵(經典を納める蔵)でしたが、明治時代に皇室に献納され、現在の場所に移築されました。聖語蔵には、およそ5000巻の経巻が納められており、それらは、①写経、②版経、③雑書の三つに分類され、さらに①は隋経・唐経・天平十二年御願経(光明皇后御願経)・神護景雲二年御願経(称徳天皇勅願経)・それ以外の写経(優劣により甲種・乙種に分類)に、細分されています。



49-1 牙櫛



⑦ 続々修正倉院古文書 第46帙 第8巻



⑧ 善見律 卷第三

期間中の行事等

❖ 公開講座 ❖

10月22日(土)

「正倉院宝物の平脱・平文」

木村 法光 氏

(元宮内庁正倉院事務所保存課長)

10月29日(土)

「正倉院に納められた銭貨をめぐって」

細川 晋太郎 氏

(宮内庁正倉院事務所保存課調査室研究員)

11月5日(土)

「正倉院の荘厳具 一大幡に寄せて」

清水 健 (当館学芸部工芸考古室長)

◆13時30分より15時まで。(開場13時)

定員各194名。当館講堂にて。聴講無料。

※入場には入場整理券が必要です。12時から講堂前にて、お1人様につき1枚配布いたします。

※配布は講座開始30分後で終了します。

※入場整理券受け取りの際には、本展の観覧券もしくはその半券、国立博物館パスポート等をご提示ください。

❖ ボランティア解説 ❖

「正倉院展のみどころ」

正倉院展会期中、当館ボランティアがスライドを使用して展覧会のみどころを分かりやすく解説いたします。ご鑑賞にあわせて、ぜひお立ち寄りください。

◆毎日 ①10:00～

②11:00～

③12:00～

④13:30～

⑤14:30～

※10/22、10/29、11/5は公開講座のため、④と⑤は中止

※所要時間 約30分

◆当館講堂にて(各回、20分前より開場)

※満席になり次第締切とさせていただきます。

◆聴講無料

◆先着194名(事前申込み不可)

第68回 正倉院展 出陳宝物一覧

(平成28年10月22日～11月7日)

番号	所在倉	名 称	略 称	員数	初出陳
1	北倉	通天牙笏(つうてんげしゃく)	象牙の笏	1 枚	
2	北倉	大魚骨笏(だいぎょこつのしゃく)	鯨の骨の笏	1 枚	
3	北倉	雲鳥背円鏡(うんちょうはいのえんきょう)	雲・鳥・飛仙文様の鏡	1 面	
4	北倉	漆皮箱(しっぴばこ)	鏡の箱	1 合	
5	北倉	烏木石夾額屏風(とりきいしきょうけちのびょうぶ) 第1扇・第2扇	板締め染めの屏風	2 扇	
6	北倉	漆胡瓶(しっこへい)	ペルシア風の水差し	1 口	
7	北倉	出入帳(しゅつにゅうちょう)	宝物出入の記録	1 巻	
8	中倉	銀平脱箱中蓋(ぎんへいだつのはこのなかぶた)	箱の懸子	1 口	
9	中倉	榎楠箱(べんなんのはこ)	献物箱	1 合	
10	南倉	蘭箱(いばこ)	植物を編んだ容れ物	1 合	
11	中倉	白葛箱(しろかずらのはこ)	植物を編んだ容れ物	1 合	
12	中倉	粉地金銀絵八角長几(ふんじきんぎんえのはっかくちょうき)	献物用の台	1 基	
13	中倉	檜八角長几(ひのきのはっかくちょうき)	献物用の台	1 基	
14	北倉	縹地唐草花鳥文夾額緋(はなだじからくさかちょうもんきょうけちのあしぎぬ)	板締め染めの裂	1 片	
15	南倉	赤紫縹緋幾帳(あかむらさきろうけちあしぎぬのきじょく)	献物用の台の上敷き	1 張	
16	中倉	布作面(ふさくめん)	麻布の面	1 枚	
17	中倉	布作面(ふさくめん)	麻布の面	1 枚	
18	南倉	竽(う)	管楽器	1 管	
19	南倉	笙(しょう)	管楽器	1 管	
20	南倉	大幡残欠(だいばんざんけつ)	大型の染織幡	1 旒	
21	南倉	大幡脚(だいばんのあし)	大幡の脚	1 条	
22	南倉	大幡脚(だいばんのあし)	大幡の脚	1 条	
23	南倉	大幡脚(だいばんのあし)	大幡の脚	1 条	○
24	南倉	大幡脚(だいばんのあし)	大幡の脚	1 条	○
25	南倉	紫地唐花鳥獸文錦大幡脚端飾(むらさきじからはなちょうじゅうもんにしきのだいばんのきゃくたんかざり)	大幡の脚のかざり	1 枚	
26	南倉	浅緑地鹿唐花文錦大幡脚端飾(あさみどりじしかからはなもんにしきのだいばんのきゃくたんかざり)	大幡の脚のかざり	1 枚	
27	南倉	大幡芯裂(だいばんのしんぎれ)	大幡の芯の施	1 枚	
28	南倉	平脱鳳凰頭(へいだつのほうおうのかしら)	象嵌装飾の鳥獸頭	1 箇	
29	南倉	銀平脱龍船墨斗(ぎんへいだつりゅうせんのぼくと)	象嵌装飾の墨壺	1 口	
30	南倉	磁皿(じざら)	二彩の大皿	1 口	
31	南倉	磁皿(じざら)	二彩の大皿	1 口	
32	南倉	磁皿(じざら)	二彩の碗	1 口	
33	南倉	花虫背八角鏡(かちゅうはいのはっかくきょう)	花・蝶・仙人文様の鏡	1 面	
34	南倉	花虫背八角鏡(かちゅうはいのはっかくきょう)	花・蝶・仙人文様の鏡	1 面	○
35	中倉	続修正倉院古文書後集(ぞくしゅうしょうそういんこもんじょこうしゅう) 第三十三巻	造東大寺司の業務報告書の控え	1 巻	
36	中倉	唐草文鈴(からくさのすず)	かざり金具	10口	
37	中倉	子持鈴(こもちのすず)	かざり金具	14口	
38	中倉	梔子形鈴(くちなしがたのすず)	かざり金具	14口	
39	中倉	瑠璃玉飾梔子形鈴(るりだまかざりくちなしがたのすず)	ガラス玉付きのかざり金具	6 口	
40	中倉	杏仁形鈴(きょうにんがたのすず)	かざり金具	1 口	
41	中倉	瓜形鈴(うりがたのすず)	かざり金具	1 口	
42	中倉	蓮華形鈴(れんげがたのすず)	かざり金具	3 口	
43	中倉	瑠璃玉付玉(るりだまつきのたま)	ガラス玉付きのかざり金具	10口	
44	中倉	瑠璃玉付玉(るりだまつきのたま)	ガラス玉付きのかざり金具	8 口	
45	中倉	露玉(つゆだま)	かざり金具	10口	
46	南倉	和同開珎(わどうかいちん)	銅銭	15枚	○
47	南倉	神功開宝(じんぐうかいほう)	銅銭	1 枚	○
48	南倉	アンチモン塊(あんちもんかい)	アンチモンのインゴット	1 箇	○
49	中倉	牙櫛(げのくし)	象牙の櫛	3 枚	
50	中倉	木笏(もくしゃく)	木の笏	1 枚	
51	中倉	革帯(かわおび)	革の腰帶	1 条	
52	中倉	柳箱(やなぎばこ)	腰帶の箱	1 合	
53	北倉	金銀絵花葉文黄施(きんぎんえかようものきあしぎぬ)	巾着袋の残片	1 片	
54	北倉	浅紅地亀甲文花文縹緋羅(あさべにじきっこうかもんろうけちのら)	巾着袋の残片	1 片	
55	中倉	撥鏤飛鳥形(ばちるのひちょうがた)	染め象牙の鳥形かざり	3 枚	
56	中倉	黄牙彩絵把紫牙撥鏤鞘金銀莊刀子(おうげさいえのつかむらさきげばちるのさやきんぎんそうのとうす)	小刀	1 口	
57	中倉	続修正倉院古文書(ぞくしゅうしょうそういんこもんじょ) 第三巻	御野国の戸籍	1 巻	
58	中倉	正倉院古文書正集(しょうそういんこもんじょせいしゅう) 第三十一巻	出雲国の給付者名簿	1 巻	
59	中倉	正倉院古文書正集(しょうそういんこもんじょせいしゅう) 第十四巻	和泉監・摂津国の決算報告書	1 巻	
60	中倉	正倉院古文書正集(しょうそういんこもんじょせいしゅう) 第五巻	造東大寺司の出した文書ほか	1 巻	
61	中倉	続々修正倉院古文書(ぞくぞくしゅうしょうそういんこもんじょ) 第四十六帙 第八巻	写経所の上申書ほか	1 巻	
62	聖語蔵	善見律(ぜんけんりつ) 巻第三	光明皇后御願經	1 巻	○
63	聖語蔵	舍利弗問經(しゃりふもんぎょう)	始二部一切經	1 巻	○
64	聖語蔵	十地經論(じゅうじきょうろん) 巻第六	舶載經	1 巻	○